遺跡分布図の活用法について

出　口　雅　人

I

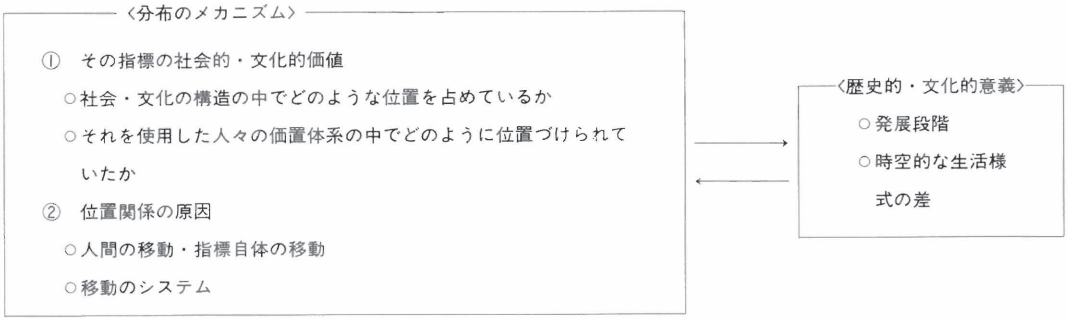
後藤和民氏が『千葉市史』において，本県地域の縄文文化の特徴を端的に示す「貝塚文化」について具体的な記述を行ってから，すでに10年を経ている(註１)。後藤氏はその間に自説にのっとった論を展開し，広く一般にまで知れわたっており既に仮説の域を脱しているように思われる。

この10年といえば，県内でも発掘調査の数が激増し，縄文文化に関する資料も当初とは比較にならない程の量に達しているはずである。それにもかかわらず，(今から比べれば)わずかな資料を駆使して形作られた説に対して修正はあまりなされずに来たように思う。〝縄文談義〟の際には異論がたくさん出るにもかかわらず，同じ土俵の上で検討される機会が少なかったようである。

これは一つには，資料は増えたものの充分に活用されていないことにあると思う。１遺跡の〝例〟をいくら積み重ねてもそれだけでは〝地域文化〟といった大きな問題は解明されないだろう。また，資料は増えているとはいえ，利用されず忘れられていくものがあまりにも多いように思う。なんとか，得られた資料の価値を最大限に活かせるような方法を検討しないと，本当は資料は蓄積されないのである。

そういった意味で，遺跡分布図と地名表の作製は大変意義があると思う。発掘調査や分布調査の度にデータが書き加えられていくような台張があったら大変便利であろう。また，〝地域文化〟といった大きなスケールの問題を解明するには，市町村等の枠を取り払ってなるべく均等な視点でデータをまとめていく作業が不可決だと思われる。

この文では，このような目標を前提にしてどんな分布地図・地名表を作製するかという問題について主に取上げる。まずそれに先立って，考古資料の「分布」について自分の考えを述べておきたい(註２)。



第１表

II

考古資料の分布は人間集団の行動によってなされたものである。この大前提に従って，我々は逆に集団の行動，あるいは集団自体を捉えようとする。しかし，それを分布図から直接読みとることはできない。知り得るのは資料がそこにあったという事実（「分布」）であって，それがなぜそこにあったのか（「分布のメカニズム」）を知るには，また別の方法が必要である(第１表参照)。つまり分布図から分布の数・密度などの差異を認識し，線引きをすることはできるが，その差の意味を知り，文化的・社会的な位置づけをすることは直接はできないのである。そこで，分布研究は次の２段階の作業として説明できよう。

(1)　文化の指標の分布を捉える段階

これによって分布の「地域差」が示される。

(2) 分布のメカニズムを明らかにする段階

指標がそこに存在する意味を検討する。この段階ではじめて「地域差」が具体的な内容を持つ。すなわち，分布の文化的，社会的な位置づけの段階である。かつて，土器特定型式を社会に結びつけようとする考えがあった。ここには,「分布のメカニズム」の検討の視点が欠如しているのである。

次に，分布研究を行う際の基準となる「単位」の問題である。先程触れたように，分布を直接指示していたのは人間集団であるから，理想的にはなんらかの社会的な単位を把握できれば一番良いのであるが，それを示すような絶対的に優位な指標は存在しないと思われる。また，文化の単位についてもそれは今のところ見出せない。

チャイルドの「分布的分類」法(註３)は考古学的に「文化の単位」を設定する方法であった。その基準となる指標は「特徴型式」である。それは特徴を明確にでき，最もよく排他性を示すもの，としてそうした基準にあてはまる諸型式の「共存」「組合せ」をもって考古学上の文化の単位とする，とした。しかし，彼自身認めるように，人間行動の総体において枝葉末節にすぎない指標を絶対的に優位な「単位」として位置づけられるだろうか。もしも，そのような単位でより本質的な部分を区分してしまうとしたら問題であろう。やはり，彼が「特徴型式」とした土器型式も何らかの社会関係を示す点で優位ではあっても，一文化指標として相対化して検討するべきものだと思う。

しかし，わが国の考古学では少なくとも分析作業の段階では絶対的に優位な「単位」が存在する。それは「集落」あるいは「遺跡」である。概念的には「集団の拠点であり，行動の帰結点」としての「集落」が考えられるが，ここでは分布研究の視点から分析的な「遺跡」の段階で扱う。すなわち，遺物や遺構の集中的な分布や周囲の分布の空白をもって認識されうる「地理的空間」としての遺跡である。

断片的といえる考古資料においても扱う文化の指標は極めて多く，多少ともその動態は指標ごとに異なるわけで，遺跡を分析の核とした分布研究ではそれらを組合せて考えられる点で有利であろう。

III

さて，こうした考えを基に実際の作業に触れてゆこう。

実際，遺跡を核として様々な文化要素を検討し総合的な研究を行うということは，もちろん簡単にできることではない。地域の研究者の共同体勢と長い時間を必要とするだろう。その第一歩として行うべきことは，遺跡地名表と分布地図づくりである。

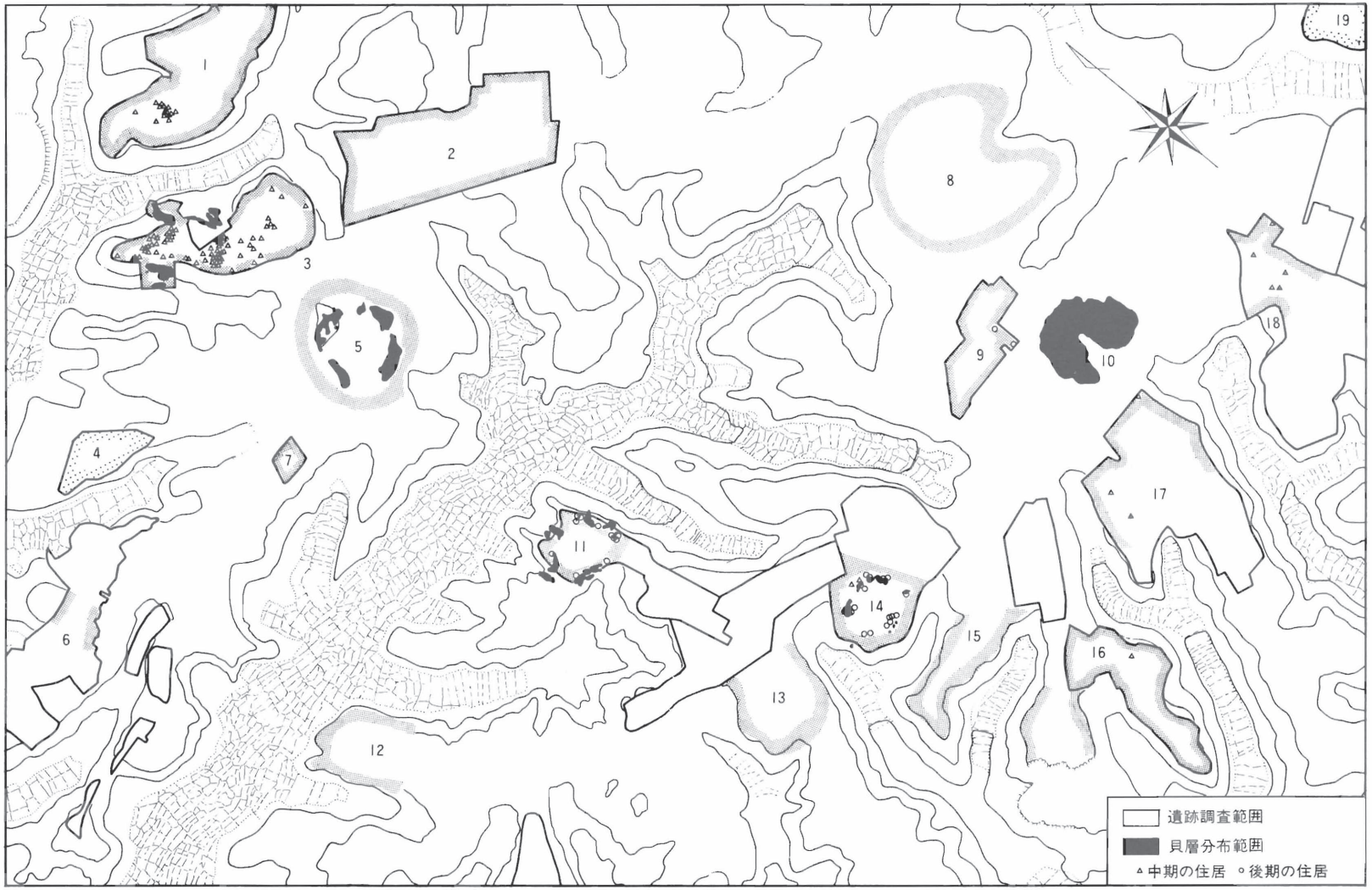
地名表には，なるべく多くの情報を組みこむのが理想的だが，あまり繁雑になってもいけないだろう。すると，様々な文化要素のうちで，何を指標として選択するかであるが，その際に,「何を指標とすれば」「何がわかるか」という点についてある程度の予測を立てておけば，対象とする項目を有意に絞ることができるだろう。例えば，石器等の道具類の組成の分布によって，生産形態の地域性が把握できる可能性がある，という予測が成り立てば，表に「道具類」という項を設ける，というようにである。

第１図及び第２表は例として作製した分布地図及び地名表である。対象範囲は当センターで昭和49年度より広域調査が行れている千葉東南部ニュータウン事業地内のほぼ中央部分である。

地形図は１万分の１になっているが，作業段階では日本住宅公団首都圏開発本部発行の「千葉東南部丘陵地区現況図・５千分の１」を使用した。スケールは，各遺跡内の遺構の配置が記入できる程度が良いと思われる。今回作製してみて，５千分の１ではややそれが難しい状態であったこともあり，今後は各市町村で頒布している２千５百分の１の都市計画図を利用しようと考えている。

分布地図では，調査された地点を太線で示し，そのうち縄文中・後期の遺物の出土した範囲にトーンをかけた。また，貝層の散布範囲をぬりつぶした。

地名表には，時期的な消長を示し，いくつかの遺構・遺物について必要と思う項目を設けた。この中で，可能なものについては類型化した方が良いと考えたので，貝層について従来から行われている「馬蹄形・環状」「点列」「点在」といった規模の他に，構成貝種を記号化してみた(第3表)。人工遺物の項は検討中であり，今回は参考程度の記入になってしまった。狭い地域内でも11（図・


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
遺跡調査範囲
貝層分布範囲
△中期の住居 ○後期の住居
0 100 500 1000m
トーンは中・後期の遺物分布範囲 密 疎

第1図

地形区分			No.	名称	早	前	中	後	晩	遺構	貝層	備考	県No.
村田川低地河口（北岸）	有吉支台	赤塚支谷	1	鎌取						E II～IV住14 土坑10		調査（未報告）	868
			2	馬ノ口						炉穴3		調査	870
			3	有吉北貝塚						阿～E IV　中峠～E III中心の環状集落　土坑	点列(大きな斜面貝層) B I II　afk	集落の$\frac{3}{4}$を調査済(～S62,未報告)	865
			4	有吉南						炉穴2		調査	873
			5	有吉南貝塚								貝層範囲確認調査	871
			6	有吉城No. 9								調査（未報告） 中期主体	875
		泉谷津	7	有吉城No. 11								調査（未報告）	875
			8	白鳥									993
	金沢支台		9	六通								調査	
			10	六通貝塚						B住2	馬蹄形 B I III（シオフキ）	貝層範囲確認調査 S24東大調査　表採により石鏃多数	992
			11	木戸作貝塚						堀10	点列 B II　Iak	集落全域を調査 石斧・石皿・凹石多数	995
			12	椎名崎							貝塚ありか	貝層未確認	1015
		小金沢	13	道作									1007
			14	小金沢貝塚						E末住2　堀住17	点列 B I II　akf	集落全域を調査 石斧・石皿・凹石多数・石鏃2	1012
			15	小金沢古墳群（2次）								調査中	
			16	御塚台								調査中	1004
		大金沢	17	ムコアラク						炉穴18		調査 石鏃1	1001
			18	六通金山						E住5　埋甕3 炉穴42	地点 B II a	調査	1023
			19	白鳥台								調査	1020

第2表

A　　群	湾奥干潟群集
	◎**マガキ・ハイガイ・オキシジミ** ○ウミニナ（イボウミニナ・ウミニナ）・サビシラトリ （× アサリ・オオノガイ……この域にも混じる × ナミマガシワ・タマキビ・カリガネエガイ・スガイ……カキ礁に付着
B　　群	湾奥砂質底群集
	◎**ハマグリ・キサゴ**（イボキサゴ・キサゴ）**・アサリ・シオフキ・ツメタガイ・アカニシ マテガイ・カガミガイ・サルボウ・オキアサリ** ○ミルクイ・オオノガイ・バイ・バカガイ
C　　群	湾奥泥質底群集
	△アカガイ
D　　群	湾口部砂礫底群集
	△イタボガキ

E　　群	湾外沿岸砂底群集
	◎**チョウセンハマグリ・ダンベイキサゴ**　　○コタマガイ △ベンケイガイ・オニアサリ
F　　群	岩礁性群集
	○サザエ・アワビ・オオヘビ・イシダタミ　等 △ナミマガシワ・タマキビ・カリガネエガイ・スガイ

K　　群	感潮域群集
	◎**ヤマトシジミ** △カワアイ・ヘナタリ・カニモリガイ

T　　群	淡水域群集
	○ニホンシジミ（マシジミ）・カワニナ・タニシ類 △イシガイ・カワシンジュガイ

第3表　松島1982（註4）を参照　　（多）◎－○－△－×（少）

表の遺跡ナンバー）の木戸作貝塚や14の小金沢貝塚のように，台地全面の調査にもかかわらず石鏃等の狩猟用具が皆無に近い遺跡もあれば，表採によってもたくさん発見されている10の六通貝塚のような遺跡もあるなど，是非比較対象のできる項目にしたいと考えている。

Ⅳ

この2つの図と表は，今回〝例〟として作製したものである。実に部分的なものにすぎないが，この範囲だけでも作製にはかなりの手間を要した。今後表の項目や図の記載方法などを吟味しながら作製にとりかかりたいと思っているが，もとより個人の力で続けていくにはいささか大変な作業である。一人でも多く主旨に御賛同下さる方を得たいと思う。また，内容等についての御批判・御意見を受けることによって，できるだけたくさんの研究者の役に立つものを作っていきたい。特に地名表で①設置すべき項目，②記入の方法③時期区分について御教示願えれば幸いである。

註

1）後藤和民　1974「社会と集落」『千葉市史原始古代中世篇』

2）この項での言葉は，端信行「文化の地域構造」『総観地理学講座』9，1985から借りている。文の性質から引用句とすることは避けた。

3）チャイルドV.G.1956『考古学の方法』

4）松島義章　1982「漁撈対象動物（貝類）の地域性」『季刊考古学』1